

中世日本の

海運の要、

越前の湊

みなと

戦

国時代、人や物が頻繁に行き交い、軍事的にも経済的にも重要な拠点であった湊。当時、湊を統治下に置くことは、その経済力や物流機能を手に入れることを意味しました。越前では、三国湊と敦賀湊が海運の要港として古くから知られています。

三国湊は、室町時代末期頃に成立したとされる日本最古の海商法規『廻船式目』に、日本の十大港湾「三津七湊」のひとつとして挙げられており、日本有数の湊として栄えていました。天文20（1551）年には、明の船も入港したと伝わっています（『朝倉始末記』）。また、三国湊は、越前の最大の



「越前三国湊風景之図」慶応元（1865）年（みくに龍翔館蔵）幕末期の三国湊を九頭竜川左岸側から俯瞰した風景図。多くの寺社とともに、川に沿って蔵と帆船がびっしりと描きこまれ、この頃の繁栄の様子が伝わってきます。

河川である九頭竜川の河口に位置し、日本海沿岸各地と越前国内を結びつける重要な役割を果たしていました。朝倉治政下の朝倉義景の頃には、家臣中最有力の国人、堀江景実が三国湊の統治に当たつ

ています。

天正元（1573）年、織田信長が越前に侵攻。朝倉氏は滅ぼされます。翌2（1574）年に、当時の三国湊をうかがい知ることができると文書が発出されています。文書は、信長が足羽郡北庄の橋屋に対して、唐物（中国大陸からの渡来品）や絹織物を商う座（同業組合）を三国湊に置くことを認め、税として絹一疋を徴収する特権を与えるものです（『橋栄一郎家文書』）。当時、三国湊の商業が盛んだったことがわかります。

一方、敦賀湊は、古代・中世から中国大陸との交易地であり、また越前以北の日本海沿岸地域と京阪地域を結ぶ中継港として非常に重要な位置を占めていました。各地から敦賀湊まで運ばれた荷は、陸揚げされ、馬で琵琶湖北岸の海津（滋賀県）まで運び、そこから大津（滋賀県）まで船で湖上を行き、大津から京までは再び馬で運ばれたのです。

朝倉氏は、この敦賀に郡司を置き、この地を掌握。代々、朝倉宗滴など朝倉総大将を務める重鎮に守備させました。豊臣秀吉による全国統一後は、更なる発展の契機が訪れます。秀吉によって敦賀湊は物流基地化されたのです。応仁の乱以降荒廃した

京都の再建や秀吉の大坂・伏見城の建築のため、敦賀に資材を陸揚げし、琵琶湖を経由して京・大坂へと運んだのです。また、商人は日本海沿岸の諸藩と関係を結び、蔵宿として年貢米の輸送を行い、豪商に成長する者も現れるなど、敦賀湊は、上方と北国との間を結ぶ中継商業都市として発展していったのです。

中世日本の海運の要であった三国湊と敦賀湊。江戸時代には北前船の寄港地となり、全国的流通拠点として、さらに大きな飛躍を遂げていくこととなります。

関連史料・ゆかりの地

湊之城址



南北朝期、新田義貞の重臣（新田四天王の一人）、畑六郎左衛門時能が築城した湊之城。かつて天台宗寺院千手寺があったところであり、千手寺城ともいいます。戦闘に備え寺を城塞化したといわれており、戦国時代には、朝倉氏の支城として、家臣の桜井新左衛門が居城したと伝わっています。

【住所】坂井市三国町山王2丁目（えちぜん鉄道 三国駅から徒歩 15分）

参考資料等

『福井県史』通史編2 中世 福井県
仁木宏編『中世日本の流通と港町』清文堂出版